

## PL 教団の組織と布教体制

PL 教団は、日本では教団本部である大本庁をトップとして、教区、ブロック、教会、支部、布教所、団、班というヒエラルキーによる組織化が図られてきた。教区、ブロック、教会には大本庁から聖職者が派遣され、教区長、ブロック指導部長、教会長として指名される。教区は県単位のブロックが二つあるいは3つ集まったもので、ブロックは教団組織の最小単位としての教会の集合体である。支部以下は会員と呼ばれる信者が自主的に運営する任意団体で、信者が支部長、布教所長、団長、班長の任に当たり、大本庁からの財政的支援はない。支部は信者（家族数）が300戸になると教会に昇格し、大本庁から教会長が派遣されるようになる。

ブラジルは一つの教区として位置づけられ、以下、ブロック、教会、支所、出張所がおかれている。ブラジル布教の黎明期には日本と同様に組織化が進められたが、非日系ブラジル人の間に教えが広がり始めてから「団・班」は作られなくなったという。

ブラジル布教は大本庁の統括的なイニシアティブによって進められてきたといえよう。たとえば、ブラジル PL 教団の礎を築いた東良三は、1957年3月に新天地で教えを広めようとサントス港に到着し、サンパウロ市内のホテルでコックとして働きながら布教を開始した。彼は移住者の信者と集会を開くようになり、同年10月にはブラジル布教の専任教師第1号を大本庁から呼び寄せている。その後、他の地域への布教路線拡大も大本庁の出先機関であるブラジル本庁のイニシアティブに依っている。

ここで、布教体制について教団組織のありようを踏まえながら天理教や生長の家と比較しておこう。これら二つの教団では、初期のブラジル伝道において信者が個人的に布教を開始したが、前号でも指摘しておいたように PL 教団では当初から教団主導で始められている。生長の家の場合、後に組織化と統合が進められ、布教体制は本部の主導に委ねられるようになった。そのため、生長の家もその統括的な布教体制は PL 教団に通底しているといえよう。ところが、天理教は少し異なる。教団組織内にサブ組織としての「系統」がある天理教では、系統（直属教会）ごとで自律的な活動がみられる。その結果、信者には「系統」というアイデンティティが生まれ、「系統」はさながら教団内教団の様相を呈することさえある。それは、信者間にある種の競争意識を生んで有効に働く場合もあるだろうが、布教力の分散にもつながりかねない。実はこのことは宗教法人のありようにも見て取れる。PL 教団と生長の家では、各拠点の一つの宗教法人として登録されている。一方、天理教では例外はあるものの教会ごとで法人格を取っている場合が多いのである。

## 多国籍宗教としての PL 教団：天理教との比較

さて、中牧弘允は PL 教団を多国籍企業になぞらえて多国籍

宗教と呼んだ。PL 教団の布教師がブラジルを拠点として新たな布教地に赴いて活動に勤しんでいる姿は、多国籍企業戦士らが新たな市場を開拓する姿に例えることもできよう。事実、PL 教団では新天地での布教活動を開拓布教と呼んでいる。ブラジルの教勢は、そのような開拓布教の勇士らによって伸びてきた。

PL 教団は天理教と同じように教団組織に階層的な構造を備えているが、組織運営のあり方をみるとそれらの機能の仕方は全く異なっている。PL 教団では各組織単位は上位の組織が下位区分されるかたちで産み出されており、大本庁、あるいはブラジル本庁という中央組織で育成された教師が地域に派遣されることによって、布教前線の拡張と会員の教化が行われる。教団は、あくまでも一つの企業体としてのまとまりを持ちながら組織的に動いているのである。教会長はいわば本社から派遣された支店長である。

一方、天理教の場合、教団は各教会長が自らの采配によって運営する「個人経営」の教会が集合したものであり、一つの組織体とは言いながらもその意味で PL 教団とは異なっている。先述したように、天理教では系統ごとで布教師を派遣し、それぞれが拠点をつくってきた。さらに、ブラジル布教に出たとはいえ本部や系統からの支援を受けることは少なく、まずは生活基盤を確保するために仕事を見つけねばならないという布教師がほとんどだったのである。

## 指導者の育成

ブラジルの教勢が発展して教会等の拠点数が増加すると、教師や補教師を増強する必要性が生まれてきた。そこでブラジル本庁では、1977年、一時的措置として常勤補教師25名と教務補佐の若い女性である DS (divine sister の意味でディーエスと呼ばれる) を養成した。さらにそれを発展させるかたちで教校特科講習が年末に開かれ、男性9人 (日系2人、非日系7人) の教師を誕生させた。1978年3月には教校が開かれ、1期生9人が入学した。研修期間は約半年で、布教の第一線に出ていった。日本から布教目的のために教師が最後に派遣されたのは1978年12月のことであり、それ以降はブラジルで育てられた教師が専従者として布教及び信者の教化にあたっている。1985年の段階で8期生を迎え、入学者総数は73人、そのうち教師になったのは44人だった。9期生には、約6年にわたる長期の養成が行われた。平均して就学期間は1年半だが、近年研修期間がさらに長期化する傾向があるという。

2000年12月現在、ブラジル教校を終了した人数は119人 (非日系人89人) である。そのうち55人が教師の立場にあるという。近年では、日本から布教の研修で1年間ブラジルに滞在する教師もいる。ブラジルの活動が日本の PL 教団を活性化させているという状況が窺える。